



## 待降節第 4 主日 (マタイ 1:18-24)

ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい

12月14日、長崎教区のペトロ宮川俊行神父様がお亡くなりになり、通夜、葬儀ミサが浦上教会で執り行われました。90歳でした。長崎教区で唯一人東大卒の神父様で、大神学院では集中講義でお世話になりました。純心大学でも教鞭を執っておられたので、純心の卒業生はお世話になっていると思います。主の降誕を一週間前にした今週、宮川神父様の追悼を通してご降誕の最後の準備に充てたいと思います。

私が長崎の小神学校に入学したとき、宮川神父様は小神学校の三階の部屋にお住まいでした。部屋を出入りする一瞬だけしか、お目にかかることはありませんでしたが、部屋中に書物が積み上げられ、通路にも書物が平積みされていたのを覚えています。

宮川神父様は数々の伝説をお持ちでした。長崎東高から旧制一高、のちの東大を受験するのですが、「試験はとても難しいから、しっかり勉強して受けなさい」と先生に言われ、入念な準備をしていきました。東高に帰ると「どうだったか？」と聞かれ、「しっかり準備するようと言うので準備したのに試験が簡単だった」と不満を漏らしたそうです。

東大を優秀な成績で終え、恩賜の時計を頂きました。同僚からは「国を大きく動かす仕事をするに違いない」と思われていましたが、司祭を目指していた宮川青年は上智大学に進みました。「東大を卒業して上智に行く必要があるのか」と問われ、「東大では学べないことを学ぶためだよ」と答えたそうです。さらにローマで研鑽を積み、1963年12月21日、司祭に叙階されました。今月21日で叙階60周年のはずでした。

宮川師の専門分野は「安楽死」を含む生命倫理でしたが、福岡の神学院時代、生命倫理以外にもさまざまな分野を教えていただき、学生がひねりにひねって考えたどのような質問にも明快に、最先端の知見を交えて答えてくださいました。ローマ教皇庁立アカデミーという世界中のカトリック神学者から最高の叡智を集めたグループがありまして、当時、アジアでただ一人そのメンバーにいたのが宮川師でした。

中田神父は伊王島の馬込教会時代に宮川神父様と個人的な付き合いがありました。どんなに優れた人でも何かしら助けを必要とするものはあるものです。宮川神父様は長らく論文の清書をワープロでしておられましたが、あるときから道具がワープロからパソコンに変わりました。しかしパソコンを十分に学ぶ時間が取れなかったようで、しばしば私に「手伝いに来てくれ」と電話がかかってくるようになっていました。

「わざわざ離島にいる私を呼び出さなくてもよさそうなものなのに」と、何度思ったことでしょうか。けれども学生時代にお世話になったことを思えば、あらゆる都合を横に置いてでも手伝ってあげなければと最終的には考え、小菅町の司祭館に通って、パソコンならではの問題解決をお手伝いしました。特に困っていたのが、ワープロは電源スイッチをい

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

きなり切っても内容が失われませんが、パソコンはそうはいかないことでした。重要な論文の内容を消してしまったことがあったそうで、それが私を呼び出す最初のきっかけでした。他にも、ワープロ時代のフロッピー内の論文をパソコンデータに変換し、移し替えたりもしました。

宮川神父様の業績を、長崎教区、日本の教会はどのように受け継いでいったら良いだろうか。中田神父は最近そのことを考えていたのでした。神父様は、専門的な研究を志す司祭育成のため、多額の寄付を残されたそうです。中田神父は慶応大学卒ではありますが、平凡なレベルなので宮川神父様のご遺志を受け継ぐことなどできません。本当は脳みそだけ特殊な液体で生かして、今後も活躍してほしいところですがそうもいきません。何が、研究者であった神父様のご遺志に沿うのでしょうか。

1983年に宮川神父様が出版した「イエズスと共に」という本があります。聖書の13の箇所を黙想する手引書で、その中に今週待降節第4主日の福音の箇所を題材に「聖ヨセフへの崇敬」について書かれた章がありました。聖ヨセフが思い巡らしたであろうことを掘り下げて、聖人への崇敬を促すという流れです。B6版で14頁くらいの分量でした。

中田神父はこれまで、ヨセフが「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」(1・19)この箇所に明快な説明を持ち合わせていなかったのです。けれども宮川神父様の本の中に、「心もからだも神様のものとなっていたマリアを、あろうことか自分の妻としようとしていた。大変なことになるところだった。ここはいさぎよく身を引き、自分にふさわしい平凡な相手を見つけよう。」このように考えたのだらうと説明していました。深くうなずける説明でした。

さらに宮川神父様の考察は続きます。「しかしわたしが身を引いたとしても、マリアを守ることはできるだろうか？マリアと、マリアの胎の子を守るのは、わたしにしか出来ない務めではないだろうか」ヨセフの夢に現れた主の天使の言葉を思い巡らしたのです。神様の計画は、マリアにだけ課された務めではなく、マリアとヨセフとに共に課されたと。30年考え続けても解けなかった疑問に、宮川神父様は40年前に答えを示してくれていたのです。

コンピューターの世界では、「集中処理型」と「分散処理型」という方式があります。日本が誇る「富岳」は集中処理型ですが、計算内容によっては世界中のごく普通のパソコンユーザーが協力したときのほうが「富岳」よりも早く結果を導くことがあるそうです。

宮川神父様は例えて言えば「富岳」でした。しかし司祭は世界中にいて、聖書を学び、黙想し続けています。長崎教区の全司祭が聖書を学び、黙想し続けるなら、いつか宮川神父様の業績を、分野によっては引き継ぐことができるのではないか。中田神父はそのように考えました。

長崎教区に教区司祭はまだかろうじて100人おられます。一人もサボらず、分散してミサ説教のために朗読箇所を学び、黙想し続ける。一人もサボらなかつたら、宮川神父様一人の業績は超えるかも知れません。

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。